

21, 74-82.  
Orlanski, I., 1968: Instability of frontal waves.  
J. Atmos. Sci., 25, 178-200.  
Palmén, E., and C. W. Newton, 1969:  
Atmospheric circulation systems.

Academic Press, 603PP.  
Widger, W. K., 1964: A synthesis of interpretations of extratropical vortex patterns as seen by TIROS.  
Monthly Weather Rev. 92, 263-282.

## 書評

## 三寺光雄 「環境大気と生態」

「生態学への招待」46年6月1日発行

共立出版株式会社 ¥ 500

「生態学への招待」全6冊というシリーズの最初の分冊である「環境大気と生態」という本書は、いま、環境破壊に苦しめられ、何んとか自然と人間の正しい循環を確立しなければならぬまいと思っている人々にとって、たいへん魅力的な表題である。

頁をひらくと、1. 自然のシステム 2. 大気をとらえる 3. 環境の破壊 4. 人間と自然 5. 日本の国土という章に分かれていてこれも、魅力のある柱のたて方である。

これらの表題は「そこが知りたい」という、お相手の気分ぴったり合ったテーマであるといえよう。

他の別冊が、森、草原、土、川と湖、海といった環境と生態との関連をとりあつかっているのだから、気象の専門家としての立場から著者は生態と環境大気との関連について受持ったのであろう。

いきおい、前半を費して、気象学自体について述べることになったのであろう。もちろん、気象学の教科書になることをおそれて、体系的な記述は、意識的にさけて最近の新しい知見についてのみ記述していこうとして

いる。しかしそれがかえって、フラグメンテ的な読後印象を与えていることもいえない。

著者が長年手がけてきた竹林、草地の生態あるいはけ崩れなどの問題を主軸にした、第3章以下で取りあつかっている、環境の問題については、さすがに面白い。

大気を気象学の対象としてのみ見るのではなく、一度それから影響を受けている環境の面から、もう一度大気をながめ、環境の一部である大気を、環境システムとして見なおしていこうという努力——それは、結実するにはひじょうな困難ではあるが——が感ぜられる。

1972年ストックホルムで国連人間環境会議がひらかれ、気象事業もこの会議が今後発展していくであろう問題性に、好むと好まざるにかかわらず、かかり合っていくであろう。そのようなときには、本書が、未だ十分には論述しつくせなかった、著者の指向する方向について、もっと論議を深めていく必要性が起ってくるであろう。そおいう意味では、一つの問題を提起している著書であるといえよう。

(神山恵三)

## 気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
流 体 力 学 講 演 会	昭和46年11月4～5日	日本航空宇宙学会流体力学懇談会	大 阪
気 候 変 動 シ ン ポ ジ ウ ム	〃 11月10日	気 象 学 会	京都大学防災研
集 中 豪 雨 シ ン ポ ジ ウ ム	〃 11月10日	気象研究所 福岡管区気象台	福岡管区気象台
第18回「風に関するシンポジウム」	〃 11月26日	日本気象学会 他8学会	気 象 庁